

教科横断的な学び

11月23日（祝）に、金沢大学附属中学校研究発表会に行ってきた。

現在、附属学校は存続の危機にある。

自分が勤務していた頃も同様な話題があった。特に金沢大学の場合、高等学校がターゲットになっていた。極端に言うとも附属学校の要不要論である。

金沢大学が「学校教育教員は養成しません。教育学研究者の要請をします。」という方針であれば、必要ない機関となることもある。

学校教育法及び施行規則のくり返される改正で、国と学長の方針による経営が強化され、国立大学法人が、世界へ打って出るのか、地域貢献を行うのかにより、国からの支援を得ながら進む道を選択しているとともに、附属学校も文部科学省からの委託研究が多くなっている状況である。

金沢大学附属中学校は、昨年度までESDを基盤に据えた研究を3年間行い、今年度からは伝統文化を基盤に据えた教科横断的な教育課程の編成に取り組んでいる。

新学習指導要領でも教科横断的な教育課程編成が求められていることで、昨年に続き今年も興味を持って参加した。

たくさんの資料を頂いたが、特に興味を持ったのは、授業者のコメントが書かれた実施要綱である。

例えば理科では、2年化学変化を先人の知恵を化学変化で解明する内容、3年力学では構造物の解析を学ぶものである。他教科も同様に興味あるコメントが書かれてあった。

実験学校なので、学校の意向で教科横断的な資質・能力を育成するためのテーマかどうかかわからないが、カリキュラムのマネジメント手法としては興味を持って参観させてもらった。

さて、近日、多忙化の問題もあり、管理運営計画に記載する全体計画の表記も簡略する方向に進むかもしれない。各学校が子供に身につけさせたい資質・能力を定め、特に重視するものは丁寧な計画を作り必要があるが、他のものは簡素に教科横断的な関わりを記載し、先生・児童生徒に説明し、意識付けする必要があるだろう。

今後の附属中の研究に注目したい。